

## 2

## NHK「無縁社会」の衝撃

私たちの社会のそこかしこで進行しながら、ほとんど目にふれない深刻な症状—孤独死—に気づかせた報道が平成22年1月のNHKスペシャル「無縁社会」だった。

平成22年9月開催の中央教化研究会議はこの番組をテーマにとりあげ、同番組担当・報道局社会部記者板倉弘政氏が講演した。

みんな、(行旅死亡人というかたちで扱われた) コバヤシさんもそうだったのですけれども、地方から、昔は金の卵などとよくいわれて、集団就職や出稼ぎにいらっシャってた。コバヤシさんも割とそれに近い。元々働いていたところは倒産されているのですけれども、それに近い状態で、東京に働きに出てきた。その新潟や秋田の、同じアパートに住んでいるかたがたも同じような境遇で東京に出てきて、東京で一生懸命働いた。ある意味、日本の高度経済成長期を支えた人たちだと僕は思うのですけれども、そのようなかたがたが晩年このような暮らし方をされているのだなど、すごく思いました。

板倉氏は、コバヤシさんの事例は自分自身の将来の姿であるとも語った。

三世同居から核家族・単身化ということと同じように、今、圧倒的に進んでいるのが未婚化です。(略)僕は今、36歳です。僕の世代というのはロス・ジェネ世代とよくいわれて、いわゆる正社員採用がぐっと絞られた世代のはしりなのです。派遣や非正規雇用が、当時、僕が大学を出る頃に、新しい働き方と



人口減少時代の宗門  
(日蓮宗現代宗教研究所／平成26年3月31日発行)



倒壊した福島県双葉町の街並(平成24年5月撮影)

いわれました。(略) やはり結婚するのはなかなかしんどいと言って、結婚していない人間が、僕の友達にも多いです。結婚していても、僕は、妻も共働きなので、子供がなかなかできていないのですけれども、やはり子供がいない。僕のような働き方をしている、やはり共働きは結構当たり前になっているのです。このようにときに、未婚化や少子化が、今もそうですけれども、実はこれからどんどん進んでいく。(略) 20年後の2030年の時代には、男性で3人に1人が生涯未婚だといわれています。女性も、4人に1人が生涯未婚だといわれています。(略) 僕はぞっとしました。

そして、板倉氏は「<sup>ちよくそう</sup>直葬」と富山県大法寺(栗原啓允住職)のこころみにふれる。

実際「直葬」という言葉もあって、いわゆる葬儀をやらない、本当に火葬するだけで、見送る人も葬儀会社だけだというものが、東京だと三割ぐらいがそのような葬儀の方法になりつつあります。何回か直葬の場にも立ち合わせていただいたのですけれども、本当に寂しくて、人間の最後の場がこのようなかたちということは、僕はなかなか寂しいものだと思います。

一方、大法寺さんでやっていることは、もちろん同じように、引き取られないようなお骨ではあるのですけれども、本堂に一週間近く、毎朝お経を上げてもら

って、安置されて、そのあと専用のところに持っていかれても、きちんとお経をもあげてもらっている。(略) いいなと思いました。

板倉氏は、「一人、救いのあるケース」を紹介する。

このかたは、自称キノシタケイジさん(略)ケイジというのは、尊敬の「敬」に、漢数字の「二」と書きます。これは、ご本人いわく、<sup>かめい</sup>仮名だそうです。その理由を聞いてみると、第二の人生は敬われて生きたいということで、敬二と名づけたそうです。なぜこのようなことが分かったかという、キノシタさんが住んでいた隣に保育園があったのです。そこの保育園の人たちが、晩年、赤の他人ですけれども、家族以上のつき合いをやっていたことが分かりました。(略)(キノシタさんは)絵がすごく上手な方だったので、保育園のシンボルマークの絵をデザインしてもらったりして、本当に家族以上のつき合いをしていたかただそうです。

保育園とケイジさんとの、「つき合い」のきっかけは、アパートにこもっていたケイジさんに、園児が声をかけたことだという。

板倉氏は、無縁社会解決のためには制度論は大事だが、「声をかけたり(略)そのようなちょっとしたところで、もしかすると無縁社会を脱していけるのかなと、個人的には思っています」と述べている。

常不輕菩薩が、「我深敬汝等」と声をかける姿を思い出すではないか。敬愛の念をもって人に「声をかける」。私たちは奈落の底に向かうような社会の危機に直面しているが、教化は、このような何でもないところから始まることに気づかせられる。

## これがお坊さんなのだ、お題目なのだ

これは、あるお寺のご住職から聞いた話です。

親元を離れて、お寺の小僧となったのは12歳の時でした。師匠は、何も分からなかった私に沢山のことを教えてくれました。私にとって父親のような存在であり、今の私があるのは間違いなく師匠のおかげなのです。師匠は、とても気さくな人でした。ある日の朝、お檀家さんのお宅に回向に出かけたきり、お昼を過ぎても戻って来られませんでした。心配になって様子を見に行くと、田んぼの中に、白衣をたくしあげて、稲刈りをしている師匠の姿がありました。驚いて、師匠に尋ねてみると、

「御主人は、今年の夏に奥さんを亡くされた。奥さんと一緒に植えた稲は、収穫時期を迎えているけれど、どうしても刈り取る気力が御主人には湧いてこないそう。そんな御主人と話をしているうちに、奥さんと一緒に植えた稲を収穫して、奥さんに新米をお供えしようということになった。一人で収穫するのは大変だから、収穫のお手伝いをしているのだ。だからお前も早く手伝いなさい。」と言われました。

こんな話は他にも沢山あって、何も分からなかった私は、「これがお坊さんなのだ」と思っていました。気さくな師匠の周りには、沢山の人が集まって来ましたし、沢山の人が師匠は愛されていたのだと思います。もちろん私もその一人です。師匠が亡くなられて30年の月日が経ち、私は師匠が亡くなられた年齢になりました。師匠の姿を今まで追いかけてきましたが、なかなか師匠には追いつけないでいます。

人の姿には、人の心が現れます。心が身体を動かし、心が言葉を創ります。心に何を<sup>たも</sup>持つのかによって、その人の言動は変わっていくのです。この話の師匠は、お題目に帰依し、お題目の布教に専心された方でした。そんな師匠の言動には、妙法蓮華経の心が溢れ出ています。妙法蓮華経を心に持ち、行動していくこと、それが本当の意味での、「お題目をお唱えする」ということではないでしょうか。